

櫻間青厓

青厓の名は幕政末期當時の畫人傳や畫史の類に見當らぬのみならず、廣益諸家人名錄の如きにすら洩れてゐる。それが明治に入つて初めて淺野梅堂の寒檠瓊綴に見え、次いで黃梁一夢、石亭畫談、後素談叢の類に見え、また雜誌東洋繪畫叢誌、繪畫叢誌、國華等に記載されてゐる。就中國華^{三一六}、所載の大槻如電翁の青厓事略が最も詳しく、且それ以後比較的乏しい青厓關係文獻は概ね是れに據つて成るものゝ如くである。今茲に畫人青厓を窺ふに當つて吾等も亦如電翁の記するところに準じつゝ、その後蒐集し得た畫蹟や資料の檢討に、舊岡崎藩士後裔の人々の口傳や舊津和野藩の多胡家に傳はる説話などを參酌して、從來史家の間に顧みるところ尠かつた彼の行歴を略記し、あはせて彼の畫業の一端に就て多少の解説を附して置かうと思ふ。

青厓名は咸字は子熙またの名善訥通稱は善次郎と云ひ、初め雨仙後に青厓と號した。別に迂齋又は蒼潤軒と稱したことがその印章に據つて知られてゐる。彼は天明六年、本郷森川茅町の本多中務大輔

菅沼貞三

の江戸下屋敷内に生れた。家祖は櫻間源次兵衛能孝と云ひ、慶長、寛永の頃、備前姫路藩主本多侯二世忠政、三世政朝に歷仕した。その後元祿の頃二代出右衛門能篤に二子があり、長子は三代出右衛門安明にして、次子の源兵衛能清は宗家と同じ祿高御切米八石五斗三人扶持を賜つて別に一家を立てた。爾來櫻間氏は宗支兩家となつた。青厓の父出右衛門能保は宗家の六代に當り、寛政の頃、參州岡崎藩主本多侯十二世忠典、十三世忠顯、十四世忠孝に歷仕し、祿高五十石を賜つてゐた。彼はその次男に生れ、家督の兄を鍊左衛門と云つた。その頃支家は五代藤兵衛が隱居し、その子新七郎が家督を繼ぎ、宗家と同じ祿高を賜つてゐたが、忠孝の代に罪を得て永の暇となつた。そこで將に絶家せんとするを、藤兵衛名跡の故を以て特に赦され、宗家の次男、青厓を嗣として相續せしめた。祿は六人扶持に削られ、醫師格で土圭の間番入となつた。これより善次郎を醫師名の善訥に改名したものゝ如くである。彼がこの支家を繼いだは天保五年八月九日、四十九歳の時で、祿仕の君は十四世忠孝^{文政四年四月九日襲封天保六年五月}

二十一、十五世忠民天保六年五月二十四日襲封日致仕 明治二年二月二十日致仕の二君であつた。

是より先、彼の消息は如何と云ふに、生れながらの地、森川茅町の本多侯下屋敷内にずっと住居してゐたものゝやうであるが、たゞ

桐隠筆 中壽星、左右呂洞賓摩姑仙女圖

京都 今村雄久馬氏藏

彼が幼より丹青を好み、夙に片桐桐隠の門に入りて畫法を學び、貧窮の中に精進してゐたことが知られてゐる。桐隠字は處翁、蘭石と號し、もと和州小泉藩主の分家、茶道石州流の祖片桐石見守貞昌の

櫻 間 青 厓

弟貞晴の後裔で、三千石を領する幕府麾下の士、帶刀入道宗幽の二男であつた。彼は一旦他家の嗣となつたが、養家に對する義によつて隠居し、専ら畫道に親み、初め狩野榮川院に學び、後渡邊玄對に就き、且また元明の古畫を慕うて終に一家を爲し、文政七年七月廿六日六十一歳で歿した。一説に文政二年歿とある。桐隠の畫作は淡彩の人物畫が殊に世に賞せられ、受業の弟子が甚だ多かつたと云ふ。青厓も亦その一人で當時飯倉片町の桐隠畫塾へ通つて、後には門生の指導に盡したと傳へられてゐる。また彼は年少の頃、書道と同藩士大藤振古に就き、武道を直心眞影流の劍士長沼亮郷の門に入つて習練した。振古は同じく本多侯下家敷内の彼の近隣に住居し、その孫元善は青厓と善く、しばしば酒料と交換に、彼の畫幅の譲與を受けてゐたと云ふ。今、元善の孫大藤鎮太郎氏所藏の日置鑑著錄「文政年中日記端識」和裝筆錄本一冊をみるに、當時の青厓の消息が窺知される。但し日置鑑は同藩の横目役にて右の日記は次に摘記する如く専ら藩務の記録であるため、青厓の消息として藩務に關する限りのものである。即ち文政二年閏九月廿四日の條に「櫻間出右衛門御用所召出候處左之通被仰付候事、二男善次郎儀櫻間出右衛門、若殿様に爲召候節は御次は罷出候様被仰付候」とある。當時の本多侯の世代は十三世忠顯にして、若殿とは世子忠考のことであり、忠考は畫法を青厓より傳授されたと云はれてゐるから、右の記事は畫法指南を仰付られたのを意味するのもかも知れない。時に青厓三十四歳。また同日記、文政四年九月廿七日の條に「櫻間謙治より私弟善次郎儀兼々逆上症罷在候

處此節別而難澁仕候ニ付剃髮爲仕度奉存候此段同役聞置吳候様届書大藤八五郎ヲ以テ差出候ニ付御家老中ニ申上候處同役承置候様被仰渡候間其段八五郎呼通達様申達候」とある。是に依れば青厓は三十六歳の時、當時の醫師や茶道に見る如く剃髮してしまつたやうである。次にまた同日記、文政七年七月十二日の條に「櫻間謙治より舍弟雨仙儀此度青厓與改名爲仕候間同役聞置候様届書茂原金之丞ヲ以差出候ニ付承リ置候其段御用人中ニ申達候」とあるに依り、彼は三十九歳の七月に、號雨仙を青厓と改めたことが知れる。青厓の落款を有する遺蹟はすべて是れ以後の筆作に成ることが推せられて、この記事は彼の作品の検討上見逃し難い資料と云ふべきである。

次に彼の交友に關し、文政八年六月廿八日に崋山が櫻間謙治を訪ひ、青厓に源之助身上等の事、萬事相頼相談したと、崋山の四州眞景紀行中に見えてゐる。崋山が青厓を斷金の友として遇したことは、一日彼が青厓を訪ひ、己が羽織を奪はれて酒に代へられ、共に痛飲したと云ふ逸話などにも知られるが、この記事も亦その親交を語るものであらう。源之助は誰か判然しないが、崋山の弟助右衛門が青厓の世話で、岡崎藩士中山氏の嗣子に迎へられ、中山家八代を相續し、忠考の代に祿高五十石を賜つて、助三郎又は順藏と稱した事實がある。されば崋山の全樂堂日記中には、しばしば青厓と來往せる記事が載つてゐる。特に天保二年三月廿七日の條に「青厓到、爲青厓活計、相共謀貸三四金」とあり、豊かならざる崋山にこの舉あるは、青厓の貧窮甚しきを知ると共に、崋山の友情が窺はれる。尙、

崋山が青厓の山水に就て、我は青厓に及ばずと云ひ、人の山水を索むるものがあれば、中には青厓に代筆せしめ落款のみ自署したと傳へられ、また崋山が嘗て青厓の許より粉本を久しく借りて返さずになつた時、その督促の書に渡邊盜太夫と書したが、崋山一見して大笑したなどと如電翁以後の青厓傳に見えてゐる。併しこの事、吾等知る限りの崋山に關する根本資料に見えず、たゞ西田春耕著山本琴谷傳島根縣津和野郷土館藏筆錄本にそのまゝが記してある。春耕は琴谷の門人、明治文雅都鄙人名錄明治十四年刊行に據れば、俊藏と云ひ當時淺草居住の畫人である。或は琴谷あたりの聞書かと推せられ山水の名手青厓を知る言として多少の根據もあらうが、代筆云々は稍誇張に過ぎる誤傳かと思はれる。

青厓の莫逆の友には尙多胡逸齋がある。逸齋は下總結城藩主水野攝津守勝剛の三男に生れ、文政九年四月、廿五歳の時石州津和野藩の家老多胡外記眞恭の跡養子として其職を繼いだ。彼は丹波方眞と云ひ、始め眞祇、幼名三男之丞、逸齋は其號にて別に至樂堂と號した。在職十七年、天保十三年四十一歳の時隱居し、名を默亮と改め専ら繪事に隱れ、慰藉を觀畫や彩管に求めてゐたが、安政四年三月廿二日五十六歳で歿した。彼は夙に畫法を桐隱に學び青厓とは同門のよしみもあつて、その交友は未だ多胡氏に迎へられぬ以前に始まり、殊更に青厓の爲人を愛しその貧窮を憐んで、年々三人口の俸米を贈つたと傳へられてゐる。參勤交代で彼が江戸詰の動靜は家臣大屋丈右衛門の筆錄にかゝる「御在府日記」島根、多胡要氏藏和裝筆錄本に詳かであ

る。今、天保二年三月より同三年六月に至る同日記を見るに、青厓しばしば來訪しその都度酒の馳走になつたことが隨處にみえる。殊に天保二年三月十九日の條に「青厓老家元本郷の小屋替に付此方樣御小屋に引越被相願御許容御座候引越被申候この趣は大目付に直に仰被扱候」と記載されてある。是れに據れば青厓がいかに逸齋の庇護の下に在つたかゞわかると共に、また一方當時彼が獨住居をして

ゐたことが想像される。以上が支家相續以前の青厓に關し、今知れる消息の主要である。

右の脚に代へ兩戸を架して、之に古氈を敷いて揮毫の場とし、疊の代りに米苞を並べて、毫も愧色がなかつたと云ふし、また椿山が夏日來訪した時着替なき衣を濯洗したため、彼は直に應接が出来なかつたと云ふ說話などから考へて、青厓は少くともその晩年には佗しく獨居してゐたものゝやうである。

極めて細く頗ぶる奇貌なり」とある。今、琴谷筆山中青厓像愛知、岡田撫琴氏に就いてみるに、その面貌右の記述と符合せるの

みならず、而も剃髪の姿をなしてゐる。琴谷姓は山本名は謙字は子讓、琴谷は其號別に癡々齋と號した。文化八年三月石州津和野に生れ、長じて龜井侯の家臣となり、畫を逸齋に學ぶ。逸齋は彼の畫才を愛し江戸に伴うて、まづ青厓に託し後崑山の門に入らしめた。殊に人物畫に秀で終に崑山門下十哲の一人に數へられるに至つた。明治六年十月十三日信州上田の客舎に歿す、歳六十三。この青厓像が何時成りしか不明であるが、琴谷が逸齋に伴はれて、石見より江戸に出たのは天保初年彼が廿二三歳の頃と云へば、青厓は既に五十歳に近い。而して本像の筆致は枯淡愛すべきもので、たとへ琴谷に才筆あるとも早期の作とは思はれぬ故本像は青厓の晩年の風貌を髣髴せるものと想定して大過なからう。但し右の畫中に「山中青厓先生像」と墨書されてゐるが、青厓の姓は本支兩家とも櫻間氏なることは本多侯の藩士明細書集錄本多子爵家藏
和綴筆寫本を見ても明かである。思ふに

青厓の遠き祖に山中氏を稱したものがゐたものではなからうか、それとも彼が支家を相續せぬ以前青年の頃一時山中姓を冒したことがあつたのではなからうか。

崑山の全樂堂日記中、文政十三年十二月廿五日の條に「爲_ニ山中青厓_ニ寫_ニ四幀_ニとあり、また天保二年五月六日の條に「山中青厓來小酌」などとある。尙逸齋の御在府日記を見るに「山中青厓入來御酒出申候」と云ふ記事が、隨處に見出される。而してまた一方青厓が中年以後剃髮し、娶らず酒仙なれどもまるで世捨人の如き餘生を送つてゐたこと、この山中姓とは何か關聯があるのではなからうか。乍然、甚だ奇異に思はれるは、彼が支家を相續せる天保五年以後に於ても、山中姓を呼稱してゐたことである。即ち天保九年、逸齋の御在府日記中にも亦天保十年、崑山の麴町一件日録中にも山中青厓と見えてゐる。されば青厓は同藩士間ではいざ知らず、文雅の交友間に於ては依然として山中姓を慣用してゐたもの、如くである。下谷に住む文晁が山東と云ひ、北山に住む寒巖に北山の姓ある如く、或は本郷臺の中に住む青厓が山中を假姓にしてゐたとも想像され、また僊客を意味する山中人を青厓の上に冠したものかと考へられもするが判然としない。かく山中姓の來由は未詳であるにせよ青厓が山中を呼稱してゐたことは以上の例證で判明であらう。

次に世に傳へられてゐる青厓に關する奇行逸話の多くは彼の飲酒癖と貧窮とに附隨して語られてゐる。既記の崑山や椿山の來訪した時の逸話や酒飲みすぎて夜の門限を忘れ、その都度藩の人々の迷惑

を重ねても常に平然としてゐたと云ふ話、また藩主や諸侯の席畫の招きに應じながら、途中で飲酒したために、その席に姿を見せぬことも一再でなかつたと云ふ話など皆この類のものである。斯く彼は權勢に屈せざるのみならず、富貴に阿らぬことは、畫料を高めてすすめても肯んぜざるに、酒をもて依頼すれば欣然と揮灑したと云ふ。實に恬淡として脱俗の趣に富んでゐた。青厓のこの風格を愛してか、逸齋は在府の時、月に三度以上に互る青厓の來訪を迎へて、必ず酒の饗應をなし、且また衣服等を贈つてゐたことが既記の御在府日記に見えてゐる。即ち同日記中、天保九年四月廿九日の條に「山中青厓入來、赤坂様方御席畫被勤候由御羽織被願候ニ付無印紋紹ノ羽織被下候御酒出ル」とあり、また同年十二月十四日の條に「山中青厓老兼而御召物拜領被相願毎々御催促被遊候ニ付今日左ニ御持被遊候七珍御紋付黒羽二重御給壹、右以手紙差付ス淺漬御無心被仰遣來ル」とある。尙また現時多胡要氏所藏の逸齋宛の青厓の書簡中に「有山堂にて先日拜借金を以て直に典店倉田屋に參り請出し早々明日參上可仕候何卒奉願」とか、「有山堂本拜借金御渡し被下候へは有難早速明朝罷出候間何分奉願候早く請出尊前上げ置候へは小子死ても外不被取候間安心仕候間何分早々奉願候」などと、恐らく逸齋の所藏本を質草となし、その請出の金子をも亦逸齋に懇請してゐると思はる、文面である。かゝる逸齋の恩顧に報ゆるに、青厓は己が畫幅を贈つてゐるが、逸齋の御在府日記をみるに、時たま淺漬大根や麥粉一袋、人參一束などを持參して、その都度重ねて、酒の馳走に

なつて居り、なか／＼もつて愛敬がある。斯の如く青厓はたとへ飲酒に過ぎるとは云へ、逸齋の所藏本を質草にしたり、衣服の寄贈を受けたり、また崑山から借金したりして、その窮乏は甚しかつた様子である。乍然彼が支家を

青厓筆 宮原逸八像

相續した以後は、些少ながら藩の俸祿を食むで居たし、また畫料も入つた筈であるのに、彼はそれ等をすべて酒に代へてしまつたのであらうか。既記宮原水雲著青厓行狀略に據れば、家兄鍊左衛門に子女多く家計苦しかったため、青厓は己の俸祿を之に贈り、且また繪事にて諸侯より賜つた金銀衣服の類は直に甥姪に與へて、己は常に粗服を着て晏如たるものがあつたと云ふ。かくの如く己を空うして肉親を慈しむ温情と無慾恬淡として顧みるところない爲人とが相まつて、彼の筆作にかゝる山水圖に見るやうな淡雅脫俗なる畫境を達成せしめたのであらう。

櫻 間 青 厓

次に晩年の青厓に關する記録には嚮の天保九年御在府日記を外にして、崑山の麴町一件日録中、天保十年五月廿二日の條に「山中青厓來、全樂堂先生弟中山順藏より承り候由様子承知致度旨申聞」とあり、また同六月十五日の條

愛知 宮原敦氏藏

に「夜小林來、獄中の來書三通持參(中) 靄厓、淡雅、雲烟、椿山、青厓等諸友高堂ニ會議」などとある。崑山が所謂己亥の厄に遭ふたのを憂慮して、相集ふ知己の中に、老青厓の姿も見えてゐたのである。翌天保十一年には文晁が歿し、同十二年には崑山が自刃し、その翌十三年には逸齋が隱世してしまつた。青厓の身邊の寂寥も年と共に深まつて行き、終に彼は嘉永四年二月十八日に齡六十六歳で江戸に歿した。彼の歿年に就て別に六十五歳説がある。併し既記大藤鎮太郎氏の母、弘化四年生れが四歳の夏、疱瘡に罹つた時、見舞に來た青厓は慥に六十五歳であつたと云へば、しばらく通説の六十六歳説に従つて置かう。武江年表に據れば嘉永三年十二月末風邪流行し春に至るとあり、翌四年二月十六日より六十日間眞先稻荷社開帳

一七

雨天續で詣人少しなどある。されば青厓は春さきの長雨に降り籠められた陋屋で佗しく病歿したのである。墓は本郷駒込蓬來町長元寺の後塋に在り、法諡を神名院天心居士と云ふ。彼は生前家兄の次子謙有を入れて嗣となしたが、現時その後裔は消息不明で、偶々墓參する者があつたとて、彼の畫名を知る者のみに限られてゐると聞く。斯く青厓はその生涯を拓落の裡に過し、墓さへ無縁のまゝに置かれてあるが、彼の畫蹟は今日に傳はり、その脱俗の畫致は識者等しく賞鑑するところである。

青厓の遺蹟に就て、吾等の親しく品鑑し得たのは、昨十一年十一月當美術研究所に於て美術懇話會主催の展觀が行はれた時、東京、愛知、京都方面の一部より蒐集したもの、就中その展觀の爲に岡崎地方の各所藏家を歴訪し探索したものとその後秋田其他より當所へ送り來つたもの、及び最近島根に赴いて調査したものなどを數へ漸く百點餘に過ぎない。固よりその全貌を窺ふよしもないが、能ふ限り博搜した結果として從來世に知られなかつた蹟を多少加へ得ることが出來た。

現存せる彼の作品で、年紀を有するもの、中、吾等の知る限りに於て最も早い作は文政八年の宮原逸八像 愛知、宮原敦氏藏紙本淡彩挂幅 裝堅七一・三裱横六五・四裱 である。圖中に「乙酉冬十月、穴原逸八老人應需、青厓隱士寫」の墨記と白文方廓印「畫三昧」及白文圓形印「雨仙」が捺せられてゐる。

圖は逸八老とその知友らが酒を汲みつゝ、談笑せる狀を寫したもので、

勿々筆を驅つて淡彩を施し、輕妙なる畫態に一脈の諧謔を湛へたるところ、崑山初期の筆意と一脈相通するものがある。畫讚の素山及び如禪道人の誰なるか未詳であるが、穴原とあるは時の藩主が御家流の宮を穴と讀み違へた爲、生涯穴原を稱してゐた宮原逸八のこと、青厓とは同藩の酒伴であつたと云ふ。文政八乙酉年は青厓四十歳の時で、既記した如く雨仙を青厓と改めた翌年に當る。これを以てか款記に青厓隱士とありて、尙雨仙印を襲用してゐる。吾等固より寡見でその全を窺ふを得ないが、彼の遺蹟中青厓改號の文政七年以前の作と想定されるものは唯一點のみ。山咸筆の款記と朱文方廓印「迂齋主人」を鈐せる布袋圖 島根、多胡要氏藏絹本著色、挂幅裝堅一一三裱横四一三裱 即ち是れである。髻の濃い所謂布袋腹の人物を稍澁滯な筆致で描いたもので、後年彼特有の伸達せる筆路は未だ見られず、寧ろ桐隱の畫風に準據せるが如きものである。桐隱の畫法をさながらに繼承せる作に孔明像 愛知、村山てい氏藏絹本著色挂幅裝堅九三・五裱横三二・一裱 がある。もと大藤元善の藏有にかゝり、元善之を青厓の家兄鍊左衛門に見せた時、軸を半ば展舒して此は桐隱殿の作ならんと云ひつゝ、尙も開きゆくに、青厓山咸の款記と白文方形連印「山咸」の捺しあるを見出して、その師の畫風にあまりにも近似なのに驚嘆したと云ふ説話が今に傳へられてゐる。本圖はその溫雅謹直なる畫態と慎重なる款記とよりみて、青厓改號の當初の作と推せられる。當時彼は好んで人物畫を描いてゐるが、その畫態には未だ桐隱の桎梏より全く脱しきれぬものが存してゐた。是れに類するものには尙、林和靖像 京都、今村雄久氏藏紙本著色挂幅裝堅八八・二裱横三〇・七裱 及び郭子儀

像 東京、小柳津邦太氏藏絹本著色挂
幅装堅一〇二・四糎横三七・八糎 等がある。何れも年紀無く、共に青厓の款記と同じく朱文方廓連印「山咸」を鈐してゐる。

文政九年の年紀を有する、青厓四十一歳の作に成るものに、張仲

景像 愛知、荻須純氏藏絹本著色挂幅
装堅一一・二・七糎横四一・五糎、仲達任棠會見圖 鳥根、多胡要氏藏絹本著色
挂幅装堅一四七糎横七七・

八等の漢畫系の外に、彼の劍道の師長沼亮郷の肖像 國華五三
一參照 が存して

ゐる。前者の一は人も知る醫祖張機の像にて、他は圖中の自讃に記す如く、龐參の故事を描いて、國老として本藩津和野に赴かんとする逸齋に贖と爲したも

の、二者共に漢人物を

青厓筆 孔明像

濃彩もて精寫してゐる。

人物の表情には尙桐隱

の薰陶の跡を留むと共に、

彩色や添景等の描

法に當時畫壇を風靡せ

る文晁畫風の影響が現

はれてゐる。この兩者混淆の一種重厚なる畫態が當時彼の作畫の特

徴と考へられる。是等と同系統のものに、呂望及草廬三顧圖 秋田、奈
良磐松氏

絹本著色挂幅装雙幅、西園雅集圖 青森、佐々木嘉太郎氏藏絹本著色挂
幅装、堅一一・五・二糎横五五・二糎 等が存する。

前者は款記に山咸とあり、朱文二重長方廓印「山咸」が鈐せられ、

後者は款記に臺山咸 但し臺
は補筆、印に前記張仲景像に見ると同じ白文方廓

山咸と朱文方廓印文二字不明の連印を鈐してゐる。何れも款記が山咸なるを以て、或は青厓改號以前の作かも知れないが、その描法に

櫻 間 青 厓

於ては前記諸作に近似する點が尤も多い。

尙また同じく漢人物を畫いたものに、蘇東坡及び林和靖圖 鳥根、多
胡要氏藏

絹本著色挂幅装雙幅、草廬三顧圖 愛知、成瀬一三氏、紙本著色挂
幅装堅一三八糎横四二・七糎 等が存する。

共に暗色がちの淡彩仕立にて、綠青、群青などの濃彩は僅の部分に

施すのみ、而して筆致は粗澁なれど稍伸張の度が加味されて、青厓

特有の勁拔なる畫態が次第に構へられてきてゐる。また畫題の取扱に於ても、既記の諸作に見る如く單に事象の説明による作圖に止ら

愛知 村山てい子氏藏

す、力めて添景の自然描

寫に留意して畫中に詩趣

を盛らんと試みてゐる。

次に青厓の山水圖中、

今知れる限りに於て年記

の最も若い作に、仙巖飛

閣圖 秋田、奈良磐松氏藏絹本著
色挂幅装堅九〇・四糎横三

六・がある。「戊子夏月、

應需臨清人仙巖飛閣圖、青厓咸」の墨書と既記の仲達任棠會見圖に

見ると同じ白文方形「山咸之印」と朱文方廓「迂齋」との小形連印

が捺せられてゐる。戊子は即ち文政十一年にして、彼四十三歳に當

る。圖は文晁風の青綠山水を濃度に過る彩色で現はし、筆致に未だ

澁滯の嫌はあるが、さすがに遠景の重疊たる山容の表現には、後年

山水畫の一境地を拓いた青厓の片鱗が窺はれる。彼の筆作にかゝる山水圖には尙、竹林書屋圖 東京、帝室博物館藏絹本著色、挂、
幅装、堅九七・六糎横四二・二糎、山間梅林圖

一九

愛知、宮原敦氏藏、紙本淡彩掛幅装九七・一捆横二七・一捆 等が存してゐる。是等は彼がその特有の畫境を樹立するに至る迄に、種々の畫法を學んで、自家の藥籠中に收めんと努力せるを實證するものであらう。即ち竹林書屋圖はその描法に於て文晁影響が認められ、その筆意に於て崑山に似通ふ點が存してゐる。但し水に臨む屋内の書見や綠蔭の巖上に釣するさまの閑寂味と竹林に風渡る涼味とが畫面に横溢せるは、彼特有の畫技に俟

り推して云はゞ彼の習作時代、文政天保の交に成れるものと考へられる。

然らば彼の畫境の完成は何時と定むべきであらうか。青厓遺蹟の山水畫中の逸品を案めて、是れに應へんとすればまづ、圖上に「甲辰春正、青厓寫」と墨書し白文方廓印「山咸之印」を鈐せる山水圖東京、宮本璋氏藏紙本淡彩掛幅装一三〇・六捆横五八・二捆を舉ぐべきであらう。畫面の中景に、一高

青厓筆 草廬三顧圖

愛知 成瀬三一氏藏

つところのものである。次の山間梅林圖は清朝畫人の蹟に見るが如き特異の筆法もて洒脫な畫致を現はせるもの、款記に青厓、印に白文橢圓形「間滋味」の遊印が鈐せられてゐる。彼が清朝畫人の跡を探りその畫技の習熟にこれ努めたことは、彼の筆に成れる清洪基筆陶淵明歸去來圖模本鳥根、多胡要氏藏紙本著色掛幅装一七九・五捆横一二〇捆の遺存せるをみても判る。以上何れも年記を缺き何時の製成か不明であるが、その畫態よ

士杖を曳いて水邊の門外にイみ、遙か群禽の飛交ふ江上を見渡してゐる。遠景に靄のかゝる山丘があり、麓には泉川が流れ出で、彼方に連山が疊々と横はつてゐる。近景の樹間に家屋二三あり、松柏の淡藍を外にして、落葉の樹々の梢に淡黄と淡朱をもて殘葉を描いてゐる。冬去り將に春來らんとする江畔の夜もほの／＼と明放れた朝暾の景趣を描いて遺憾なく、實に清爽なる畫致を有するものであ

る。殊に本圖の渺たる水江や模糊たる山容の描寫に就て人はその構圖の妙を賞ししやう。また渴筆の擦皴による墨色の諧調を讃へもしやう。或は淡雅の渲染をもつてかくばかり簡明に表現し得たるその筆技に驚嘆もしやう。されど吾等はその上に寸毫の匠氣も留めず、

甲辰は弘化元年にして恰も青厓五十九歳に當る。さればその畫境の完成を彼の五十代と想定することは誰も首肯するであらう。

尙彼の遺蹟の山水畫中、弘化年間の筆作にかゝるものに、楓林停車圖

愛知、木津泰氏絹本着色掛幅装 一三三・二裱横四一・九 及び春景山水圖 愛知、近藤半助氏藏紙本淡彩掛幅装 一三四裱横四五・三

青厓筆 竹林書尾圖

東京帝國博物館藏

觀者をして塵外の境に導く清新なる詩趣を湛へた畫格の高きを指點しやう。淺野梅堂の寒檠瓊綴に、青厓を稱して「其蹟存スル者至テ鮮矣其合作ノ山水ハ文晁崑山ノ上ニ出ヘシ」とあるが、本圖の如きは正しく梅堂の評語に合致するものと考へられる。さて本圖製成の

青厓問櫻

綱が存してゐる。共に「丁未秋日」とあり、款記に青厓、印に白文方形「山咸字子熙」を鈐してゐる。丁未は弘化四年にて彼六十二歳、正に圓熟の境に入り、自在なる老筆もて、蕭散なる畫致を示してゐる。殊に木津氏藏楓林停車圖は崑山に見るやうな濕筆を以て、潤色

ところ、簡素にして的確なる表現に成り、心たくましい迫力がみちてゐる。款記に青厓、印に白文方形「山咸字子熙」を捺してあり、年記無きものであるが、その畫致より推して彼が畫境の達成以後の筆餘に成れるものと考へられる。

次に人物畫中、弘化三年丙午の年紀を有するものに、朔臣持桃圖愛知、渡邊裕氏藏紙本著色、掛幅 裝堅一三一・五 横五七・六 寸許由洗耳圖島根、多胡要氏藏紙本著色 掛幅 裝堅一七二・五 横九七・一 寸韓信忍耻圖愛知、荻須績氏藏紙本著色 掛幅 裝堅一三〇 横六〇・一 寸等が存してゐる。何れも海彼の故事を描けるもので、その一は東方朔の像にて面貌及び、服飾の描寫に

速度ある筆致を縦横に驅使してゐる。丙午春日青厓の墨書の下に白文方形印「山咸字子熙」を捺してゐる。その二、許由洗耳圖には「丙午初夏寫爲賀多胡大兄隱居、青厓」の墨書の下に、白文方形印「山咸字子熙」と朱文方廓印「蒼潤軒」が鈴せられてゐる。現所藏者の語るところに據れば、逸齋隱居の後藩政に就て容喙を謹み、藩主の來駕を迎へる毎に、本圖を壁間に掲げ、自戒すると共に藩主に對する無音の忠諫に代へたと云ふ。畫題既に寓意を含み、筆路伸張にして、人物描寫に特徴を見出すが、筆の自在なるまゝに稍奔放の嫌あるを否み難い。その三は人口に膾炙する韓信の故事を圖し、殊にその野人の面貌を醜怪に、それと對比に韓信の面貌を溫容に表現するなど、各人物の表情を巧みに捉へて、好箇の畫趣を形成せるものである。款記に「丙午秋日、青厓」とあり、印は白文方形「山咸字子熙」を鈴す。款記青厓の厓に山扁あるも稀しく特に注意される。尙畫讚の筆者、松煥とあるは松下綱煥のことで、號を鳩臺と云

ひ、岡崎藩の儒官で、藩地に在つて子弟の訓育に従事してゐたと傳へられてゐる。

以上と略同種の作に漁夫圖愛知、星田重吉氏藏紙本淡彩 裝堅一〇八・五 横二九・一 寸がある。款記に青厓と朱文二重方廓印「山咸」を鈴するが、年記を缺く。老漁夫の面貌は奇異、その墨描は自在にして簡素なるは、前記諸作と略軌を一にせるもので、その製成期も相前後するものと考へられる。たゞ本圖は柳樹や草叢の流麗なる線描と童兒のあどけない動作の描寫など、一見燕村に見る如き風韻のある畫趣を漾はせてゐる。尙彼の人物畫中に、庚戌春日即嘉永三年、青厓六十五歳の筆に成れる壽星像愛知、宮原敦氏藏紙本著色 掛幅 裝堅一二二・八 横六〇・四 寸がある。白雲に乗する南極壽星を圖寫せるもので、その風貌は重厚怪奇にして、色彩は一種暗鬱なる色調を帶び、筆鋒鋭く心たくましい畫致を有するものである。

上記の諸作に見る如く、弘化以後の筆作にかゝる人物畫は概ねその風貌は重厚にして怪奇、その線描は鋭くして奔放、而して一種暗鬱なる畫致を呈するもの、それが晩年に近づくに従つてますます顯著になつてくる。この傾向はたゞに人物畫に限らず、彼の得意の山水畫に於て、例へば青厓と朱文方廓印「蒼潤軒」の落款を有し、年記なきも恐らく晩期の作と推せられる、楓林停車圖愛知、京極德順氏藏紙本淡彩 掛幅 裝堅一二五 横二九・二 寸等愛知、植田宗七氏藏紙本淡彩 掛幅 裝堅一二五 横二九・二 寸に於ても亦觀得される。共に樹木や巖皴を墨黒々と速度ある線描にて、匆々に揮灑し去つたもの、その畫致憾らくは寧ろ粗剛に失する。是れによつて之

を觀るに、青厓の晩年は畫三昧から酒三昧に流れ、概ね醉餘の筆のすさびに終つたものと思はれる。

偕て以上吾等寓目の青厓作品に就て概觀するに、他の畫人に於ける如く所謂若拙と稱する早期の作品は殆んど遺存しない。既記した

如く青厓と改號

せるは文政七年

彼三十九歳の時

で、その直前と

覺しき作すら稀

有である。また

青厓改號直後の

作は概ね人物像

にして、師の桐

隱の薰陶による

溫雅謹直なる畫

態に成るものが

多い。それが年と共に文晁畫系の影響を受け、畫題は旨と漢の故事を攝り、筆路は伸張の度を加へ、色彩は濃度を増し、重厚にして稍沈濁なる畫致を呈するに至つた。また一方皐山一派の詩畫一致の清新なる畫態を攝取すると共に、明清畫人の跡をも顧みて、旨と山水畫法に力を注いだ。文政年間、彼三十代の後半より四十代の前半にかけて、青厓は能ふ限り先達の蹟を學んで自己の畫境の開拓に資し

青厓筆 楓林停車圖

愛知 京極徳順氏藏

てゐた如くである。またこの間の遺蹟には、前期の濃彩畫の次第に淡彩の畫圖に代へられて、恰も過渡期を示す作品が存してゐる。而してその完成期に就ては遺蹟の限られた今日、的確の想定は困難とするも、現存の作品を基準にして云へば、既記の如く五十歳代が考

定されるのである。

その期の筆技高潮に達し、清新の氣充ちたる諸作は定めし當時の南畫壇に酒仙畫人の名を高からしめたものであつたらうと思ふ。されど六十歳以後の遺蹟を見るに、老筆自在の畫致たくましいもの

が、年と共に次第に筆路は荒び、色彩は暗鬱の調を帯びて、終に粗剛の境地に陥つてしまつた。せめて晩期を終るまで酒仙畫人の名を全うし得なかつたことは老青厓の爲に惜しみても餘りある。

次に青厓の印章に關し、前記作品を列舉するに當り煩を厭はず記して來たが、今更めて款記ある遺蹟に就て考へるに、中には畫面の大小による相異もあり、また現在限られた遺蹟に就ての檢討なる爲、

(一) 青厓筆
楓林停車圖

愛知 木津 泰氏 藏

(二) 青厓筆
山水圖

東京 山下 謙吉氏 藏

(一) 青厓筆 漁夫圖

愛知 星田重吉氏藏

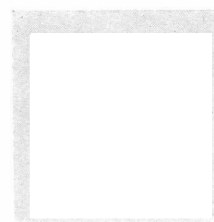
(二) 青厓筆 韓信忍耻圖

愛知 荻須 績氏藏

青
厓
筆
花
鳥
圖

愛
知
星
田
重
吉
氏
藏

青
厓
印
譜



或は偶然の一致であるかも知れ難いが、大體作畫の年次によつて、

青厓慣用の印章は略一定してゐたもの、如くである。即ち文政七年青厓改號前後の時期には、朱文方廓印「迂齋主人」、白文圓形印「雨仙」白文方形「山威」連印及び白文方廓印「畫三昧」の遊印が用ひられてゐる。文政の後期より天保にかけて、白文方廓「山威之印」と朱文方廓「迂齋」の小形連印、朱文方廓小形連印「山」「威」及び白文方形「山威」と朱文方廓印二字不明の連印等が用ひられてゐる。その後弘化元年作に白文方形印「山威之印」弘化二年作に朱文方廓「山」「威」連印が鈐せられてゐるが、弘化三・四年の遺蹟の大半は白文方形印「山威字子熙」が慣用され、また朱文方廓印「蒼潤軒」が用ひられてゐる。而して彼の晩期、嘉永年間の諸作は何れも前記白文方形印「山威之印」を用ひてゐる。是等の外に、朱文方廓小形連印「子」「熙」、朱文二重方廓印「山威」、朱文方廓印「青厓隱士」及び白文方形印「間滋味」の遊印等をそれ／＼に有する諸作が存してゐるが、何れも年紀を伴はぬため、何時用ひられたか判然しない。但しその大部分は云はゞ彼の習作時代の筆作と推定せられる作にのみ見られるところの印章である。以上が今日吾等が知れる青厓に關する資料の中、主要なるもの、總てである。

その中、年紀を有する作品の表と、是に彼の略年譜を添へて次に掲げて置かう。(昭和十二年六月)

青厓作品年表附略年譜

天明六	丙一 午歲	宮原逸八像	愛知 宮原敦氏藏	江戸に生る
文政七	甲三十 申九歲	張仲景像	愛知 荻須續氏藏	號雨仙を青厓と改む 片桐桐隱歿
八	乙四十 酉歲	仲達任棠會見圖	島根 多胡要氏藏	
九	丙四十 戌一歲	長沼亮郷像	神奈川 長沼郷治氏藏	
		仙巖飛閣圖	秋田 奈良磐松氏藏	
天保五	甲四十 午九歲	大黒天像	愛知 星田重吉氏藏	支家を相續す 醫師格土圭間番入
六	乙五十 未歲			文晁歿
七	丙五十 申五歲			崑山歿
八	丁五十 酉六歲			逸齋隱居す
弘化元	甲五十 辰九歲	山水圖	東京 宮本璋氏藏	
二	乙六十 巳歲	大黒天圖	愛知 宮原敦氏藏	
三	丙六十 午一歲	朔臣持桃圖	愛知 渡邊裕氏藏	
		許由洗耳圖	島根 多胡要氏藏	
		韓信忍耻圖	愛知 荻須續氏藏	
		楓林停車圖	愛知 木津泰氏藏	
		春景山水圖	愛知 近藤半助氏藏	
嘉永三	庚六十 戌五歲	壽星像	愛知 宮原敦氏藏	
		大黒天像	愛知 千賀平四郎氏藏	
四	辛六十 亥六歲	山水圖	愛知 植田宗七氏藏	二月十八日 江戸に歿す